

先人の足跡 9

終戦指導に老躯身命を捧げた

鈴木貫太郎海軍大将

教育問題プロジェクトチーム

中村 征人 陸自61

お孫さんやお子さん向けに始めた、道徳を考える上で参考となる軍人等の物語も今回で9回目を迎えます。

今回は、鈴木貫太郎海軍大将の物語です。

1 序言

鈴木貫太郎海軍大将は1868年(明治元年)、現在の大阪府堺町(当時関宿藩の飛び地)で関宿藩士代官の長男として生まれ、1871年野田市(当時関宿町)へ転居、1884年海軍兵学校入学(第14期生)、卒業後は

海軍軍人として日清・日露戦争を艦長・駆逐隊司令として従軍、その後は艦隊司令、海軍次官、練習艦隊司令、海軍兵学校長、連合艦隊司令長官、海軍軍令部長を歴任し、1929年侍従長(予備役編入)就任、1936年の二・二六事件による受傷・辞任までの8年間を奉職、回復後枢密院議長を務めますが、1945年4月内閣総理大臣に就任しました。

空襲による主要都市の荒廃、広島・長崎の被爆、加えてソ連参戦という状況

下、戦争終結の道を探る現実派とあくまでも徹底抗戦を唱える戦争継続派の対立の中にあつて、鍛え抜かれた不撓不屈の魂、冷静な戦争観、特に戦争終結を望まれる昭和天皇のお心を体し、卓越した指導力により、戦争終結への道をつくりあげた人です。

以下その人物像に触れて見ましよう。

2 幾多の生死を乗り越えた不撓不屈の魂

人生七転び八起きという諺がありませんが、自伝によると鈴木貫太郎大将(以下大将)は、幼・少年期に二回、海軍士官時代に四回、最後は侍従長時と合計七回生死の危機に遭遇したとあります。

1回目は3歳の時で、一家が父の江戸赴任にともない、上京途中旅籠で休憩した時、めずらしいものを見つけ道路に飛び出した時、後ろから来た早馬の足元に転げ込み危うく踏み潰されそうになりましたが、馬が飛び越え助かりました。

2回目は、7歳の時でした。関宿(大将の育った町)で釣りに行き、良い場所を探そうと水門の扉に乗ったところ、扉が下がり大将はバランスを崩し川に転落、泳ぐことは出来なかったのですが、着物を沢山着ていたため浮

力がつき、何とか岸にたどり着き一命を取りとめました。

3回目は少尉の時、乗船していた「天城」という軍艦が浅瀬に乗り上げ、脱出のため錨を短艇につるし沖に運ぶとき、操作がうまくいかず艇が錨とともに海深く引き込まれロープに絡まれた大将も10メートル近く海中に没しましたが、何とか脱出しました。

4回目は日清戦争時、清国北洋艦隊の停泊地威海衛を水雷艇の艇長として、夜間襲撃をした時です。戦艦「定遠」に近迫し水雷攻撃を行います、敵からの反撃を受け、艇は被弾、ハチの巣のようになりませんが、乗組員に一人の負傷者もなく大将も無事に帰港しました。

5回目は明治29年秋、「金剛」航海長として鳥羽港で休養停泊中、夜になり、狭い艦内は暑いので涼しい艦尾の砲塔の下で涼をとっていると、ついウトウトとなり、急に立ち上がった瞬間、大砲の砲身に頭をぶつつけ、フラフラと重心を失い7m下の海中に墜落、おりからの激しい潮に流されどどん沖合へ運ばれますが、懸命に泳いでかろうじて艦尾にたどり着きました。

6回目は日露戦争中の明治37年12月、駆逐隊司令として監視任務についていた時です。

4時ごろ仮眠をとるため部屋に帰ります。

部屋は炭火で温められていましたが通気の窓はありません。仮眠を終え朝7時ごろ艦橋に向かいましたが、途中の階段でばったり倒れました。気がつくくと上甲板の椅子の上に乗せられ、艦長以下が心配そうにのぞき込んでおりました。完全な一酸化中毒ですが事なきを得ました。

7回目は昭和11年2月に起きた二・二六事件の時です。侍従長であつた大将は昭和維新を唱える軍人たちから討伐すべき「君側の奸(天皇のそばで悪い政治を行う人)」の一人とみなされ襲撃されます。

発射された拳銃弾5発のうち4発が命中、多量の出血により瀕死の状態となりますが、駆け付けた医師の処置、特に輸血が成功して70歳の身でありながら奇跡的に命を取り留めました。

これらの経験は大将をしていかなる困難に対しても死を超越せしめたわが身を信じ、事に向かう心構えを作り上げたのです。

3 大将の戦争観と武士道

(1) 練習艦隊司令官として1918年(大正7年)練習生を率いて米国に渡り、サンフランシスコで市民を相手に講演を行いました。その内容は、「日本人ほど平和を愛する国民はな

い。日本の歴史は三〇〇年間一兵も動かさず天下をおさめた。近年外国と戦ったのは挑戦されたから止むを得ず戦った。近時、日米戦争を耳にするが、これはやってはならない。日米の兵力の損耗を来すだけで、第三国が利するだけだ。太平洋は太平の海で神がトリードのために置かれたもの、軍隊輸送に使っては天罰を受ける……」というものでした。

日露戦争時には日本へ好意をもって講和を斡旋してくれた米国でしたが、当時はカリフォルニア州で日本人移民を対象とした土地保有を禁止する法律が制定され、また米海軍はオレンジ作戦という対日戦争を想定した戦争準備計画を策定する等、日米間は緊張していました。しかし、この講演は地元では好評を受け、新聞に大きく取り上げられたのです。

この「日米は戦ってはならない、太平洋は太平の海」は大將の信念でもありました。

(2) ルーズベルト大統領他界時の言動
首相就任の経緯は後述しますが、対米戦争の最高戦争指導者として、首相に就任して間もなく、ルーズベルト米大統領の死に接します。その時、共同通信社の取材に応じ次のような弔意を述べ、そのコメントは世界に発せられました。

「ルーズベルト大統領の施政が非常に成功を取めていること、米国が今日世界で有利な地位を占めるに至ったのは彼のおかげであることを私は認めざるを得ません。その故に彼の死が米国民にとつて意味する所の大きな損失をも私は良く同感できるのであります。私の深い哀悼の意を米国民へ向けて送ります」という内容でしたが、

スイス新聞界の最長老エリー主筆は社説でこれを取り上げ「敵国の元首の死に哀悼の意を捧げた日本の首相のこの心は誠に立派である。これこそ日本武士道精神の発露であろう。連日にわたる空爆にさらされながら、敵国の元首の死に對し哀悼の意を表することを忘れない日本首相の礼儀正しさに深い敬意を表したい」と書きました。

その他、ワシントン・ポスト、ニューヨーク・タイムズも取り上げました。

「義」を重んじ「仁」を備え「礼」を尽くす武士道精神が、慰霊の心に敵味方なしとして表れたのです。

4 終戦成立時における指導力
79歳の老躯の身で総理大臣へ

昭和19年サイパン島陥落後、東條内閣は倒れ、小磯内閣が成立しますが、戦況は益々不利となり、4月には米軍が沖縄へ上陸、戦争指導の責任を取り

内閣は辞任、重臣会議は次の総理として永年侍従長を務め天皇の信任が厚く、誠忠無比の人物である大將を推薦します。しかし大將は高齢並びに政治への関与を嫌ひ断りますが、天皇直々に「この重大な時に他に人が居ない」との御言葉を受け、就任を決意したのです。

その時の心境を後日、以下のように回想しています。「余の決心の中心となったものは、長年の侍従長並びに枢密院議長奉仕の間、陛下の思召しが何処にあるかを身をもって感得した所を政治の原理に発露させていこうと決意した」というものでした。

では「陛下の思召し」を大將はいかに感得したのでしょうか。それは速やかに戦争を終結して、国民大衆に無用な苦しみを与えることなく、又彼我ともにこれ以上の犠牲を出すことなく、平和の機会を掴むことにありました。

(2) 右手で戦い、左手で和平を

当時の戦況は、海軍の連合艦隊は壊滅状態、連日の空襲で生産力は低下、深刻な食糧窮迫等があり戦争継続には著しい困難がありました。軍部特に陸軍は本土決戦を唱え、その立場を崩しませんでした。国民の中にも一部に強い反講和運動があり、現に大將の私邸はこの人達から国賊として焼き払われ

れます。

組閣にあたり大將はまず陸軍省を訪れ、陸軍に強い影響力をもつ阿南大將に入閣を要請して、同意を得ます。事後、阿南陸相の存在は徹底抗戦を叫ぶ陸軍に對し、大きな影響力を及ぼすのです。

6月に臨時帝国議會を開院し施政方針演説を行います。その内容は、
・日本人は元来平和愛好国民であり、その象徴は天皇である。この戦争は平和愛好の国是が不能となったから止むを得ず立ち上がった。
・無条件降伏は受け入れない。それならば最後まで戦う。

というものであり、これは「国体の保存を含め降伏の条件を提示してくれば、停戦交渉に出る用意がある」という連合軍側への信号でもありました。

首相として軍・国民の気持ちを引き締めると共に戦争継続の限界並びに天皇の御心を体し利平を探ったのです。

(3) 聖断を仰ぐ

聖断(その1)
連合軍側は7月26日ポツダム宣言を発表、日本に降伏を求めてきました。総理自身はこの宣言は戦争に終止符を打つものと認識しますが、本土決戦・一億玉碎を唱える軍部の強い抵抗により、政府は黙殺の態度を取ります。

しかし、8月6日広島への原爆投下、9日にはソ連参戦の事態を受け、10日未明、宣言受諾か否かを決める御前会議が開かれます。

この席で受諾か否かについて終戦派は鈴木総理、東郷外務大臣、米内海軍大臣、これに対し継戦派は阿南陸相、梅津参謀総長、豊田軍令部長と3対3に分かれます。

従来、御前会議は形式的なもので、議論はするが既定の結論に持つていき、満場一致を見て天皇の裁可を受けらるる会議でした。

天皇が自分の意に反しても発言することはありませんでした。

しかし、この御前会議では、鈴木総理はあえて天皇に裁可をお願いし、天皇は終戦への決意を述べられたのです。

この背景には、総理が永年侍従長としてお仕えし天皇のお気持ちをご十分承知していること、軍部を抑えて終戦を迎えるには、これまでの慣例を破って、天皇のお力を戴くしかないと判断したことがあります。

聖断(その2)

終戦へは聖断後もまだ問題が残っていました。受諾に対する連合軍側への12日の回答をめくり、国体の維持が不明であるから、さらに照会を必要とする意見と、戦争継続を主張する抗戦派

の巻き返しでした。

この時、総理の頭にあつたことは、事態の遅延は停戦の好機を崩し、天皇が心配される国民の死と被害が増す、更にソ連軍の南下は国土の分断を招きかねないというものでした。

そこで総理の指導力が発揮されま

す。前例のない「天皇の思召しによる御前会議」を開催、戦争最高指導者と閣僚全員による御前会議が14日10時50分に開催され、総理は従前の会議で連合軍側の回答受諾は全員一致に至つてない状況を上申、反対意見のみを上奏させ、天皇の御聖断を仰いだのです。

天皇は反対意見を聞かれた後、「私の考えは以前申し上げたとおり、これ以上の戦争継続は無理と考える」と戦争終結への気持ちを述べられます。

この時述べられた御言葉は終戦の詔書の中に盛り込まれ、15日にラジオで国民に伝えられたのです。

5 大将の晩年と国の姿

終戦とともに鈴木内閣は総辞職をします。

在任期間は4カ月余りでしたが、日本の歴史上初の戦争に敗れる事態の処理でした。

大将は郷里の閑宿に帰り隠棲します。戦後、阿南大将をはじめ多くの軍

人が敗戦の責任を感じとり自決をしました。

しかし大将はその道を選びませんでした。この事態に一番心を痛められたのは、天皇であることを察していたからです。

そこで、大将は、戦後の復興の力添えを天皇に期待し、自らは陰からこれを支援し、日本再建の姿を見届けることが己の責任と判断したのです。現在、閑宿に「鈴木貫太郎記念館」があります。

そこでは、軍人として国につくし、又、終戦指導に当たつては、国民が天皇とともに我が国の歴史を刻んできた日本国の姿の保持に、老躯身を捧げその意思を貫いた大将を偲ぶことが出来ます。

【参考文献】

- ・小堀桂一郎『鈴木貫太郎自伝』
- ・小堀桂一郎『宰相鈴木貫太郎』
- ・鈴木貫太郎述『終戦の表情』
- ・半藤一利『聖断』
- ・半藤一利『日本の一番長い日』
- ・野田市教育委員会『貫太郎翁の想い出』